小樽商科大学 広報誌
Hermes Courrier
ヘルメス・クーリエ No. 29
2011. July

小樽商科大学 創立百周年記念号

▲正門（1955年頃）

創立百周年記念特集

●小樽商科大学百年のあゆみ …… 1
■開校と初代校長　渡邊龍聖
■本学が輩出した卒業生たち
●全人教育 …… 3
●地域と商大 …… 5
●課外活動 …… 7
●商大今昔写真館 …… 9
INFORMATION …… 11

創立百周年記念特集

初代校長
（明治44年～大正10年）
渡邊　龍聖

第二代校長
（大正10年～昭和10年）
伴　房次郎

第三代校長
（昭和10年～昭和21年）
苫米地英俊

第四代校長・初代学長
（昭和21年～昭和32年）
大野　純一

第二代学長
（昭和32年～昭和40年）
加茂　儀一

第三代学長
（昭和41年～昭和51年）
實方　正雄

小樽商科大学百年のあゆみ

創立から小樽高等商業学校時代

1905（明治38）年　小樽区会、高等商業学校の誘致にのりだす
1906（明治39）年11月　第五高等商業学校、小樽に設置決定
1910（明治43）年 3月　文部省直轄諸学校官制改正により、小樽高等商業学校を設置
1911（明治44）年 3月　第一回入学試験志願者150人のうち72人が入学許可
1914（大正 3）年 3月　第一回卒業式、卒業生50人
1926（大正15）年 4月　第十四臨時教員養成所（英語）設置、28人入学
1930（昭和 5）年 3月　同上廃止
1937（昭和12）年 2月　小樽市議会で本校の大学昇格運動を起こすことを決議

1938（昭和13）年12月　小樽高商同窓会を社団法人緑丘会に改組
1941（昭和16）年12月　校内で臨時徴兵検査
1942（昭和17）年 9月　繰上卒業式
1943（昭和18）年10月　徴兵延期撤廃により学徒出陣、11月仮卒業証書授与式

小樽高等商業学校から小樽経済専門学校へ

1944（昭和19）年 4月　小樽高等商業学校を小樽経済専門学校に転換
1946（昭和21）年 4月　学友会の設立
9月　緑丘会総会で大学昇格を決議、10月小樽市議会も大学昇格を決議
1947（昭和22）年 4月　男女共学を実施、3人の女子学生の入学
1948（昭和23）年 8月　大学教育課長W.C.イールズ氏、小樽経専を視察。後、GHQが本学の単独大学昇格を許可

開校と初代校長 渡邊龍聖

小樽商科大学のルーツは、前身である小樽高等商業学校が1910（明治43）年に認可され、翌11年に開校されたことに遡ります。当時、明治政府は富国のために国民に高度な商業を学ばせることを目的に、全国各地に高等商業学校の設置を進めており、小樽高商は、東京、神戸、山口、長崎に次ぐ第五高等商業学校として設立されました。

設立に至るまでには、小樽市民の熱心な誘致運動がありました。当時の小樽は札幌より多い人口約9万人で、北辺の貿易港として大きく発展しつつありました。東京より北には未だ高商が設立されていなかった当時、候補地として名乗りをあげたのが、函館、仙台、そして小樽でした。有力候補地の函館とは激しい誘致合戦が繰り広げられましたが、敷地の提供や建設費の寄付など、小樽区住民の一丸となった活動の結果、逆転で小樽高商の設置が実現しました。

▲草創のころの校舎

▲初代校長渡邊龍聖と家族

初代校長は、倫理学を専門とする渡邊龍聖先生でした。渡邊校長は、東京音楽学校の校長を務めたこともある風変わりな経歴の人物でした。彼に白羽の矢が立ったのは、東京高等師範学校の教授としてドイツ留学中のことであり、ヨーロッパ各国の商業学校を視察した結果、商業教育が非常に重要な国家的任務をもつことを確信し、北の小樽への赴任を承諾しました。

渡邊校長の教育方針は、実学を重んじるものでした。着任会見では、「本校は商業学の原理を研究する学者を養成するにあらずして、卒業直ちに実務に当り何等不便を感ぜざる所謂実際家を養成せんとする方針なり」と述べています。実際、授業科目には、商業学、経済学、簿記、商法といった定番科目とともに、商業実践や商品実験といった本校独特の科目が並んでいました。このような実学を重んじる精神は、現在まで本学の伝統として受け継がれています。

▲高商旗

1911（明治44）年、高等商業学校として開学以来、小樽商科大学は、本年7月に創立百周年を迎えます。これを記念して、このたび写真集『北に一星あり』と学校史『小樽商科大学百年史』を出版することになりました。そこで本号では、写真集をもとに、懐かしい出来事から近年の出来事まで様々な写真で振り返り、百年のあゆみを辿りたいと思います。

第四代学長
（昭和51年～昭和55年）
伊藤森右衛門

第五代学長
（昭和55年～昭和59年）
長谷部亮一

第六代学長
（昭和59年～平成4年）
藤井　榮一

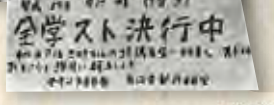
第七代学長
（平成4年～平成14年）
山田　家正

第八代学長
（平成14年～平成20年）
秋山　義昭

第九代学長
（平成20年～）
山本眞樹夫

小樽商科大学

1949（昭和24）年 5月　国立学校設置法により小樽商科大学を設置
1950（昭和25）年11月　第一回大学祭
1952（昭和27）年 3月　短期大学部を設置
1953（昭和28）年 4月　商業教員養成課程を設置
1954（昭和29）年 4月　専攻科（経理経営学専攻）を設置
1956（昭和31）年 6月　学友会を解散し、学生自治会を結成
1960（昭和35）年 6月　小樽商科大学後援会発足、募金活動開始
1965（昭和40）年 4月　管理科学科設置
1969（昭和44）年 4月　学生紛争により入学式中止
　　8月　緑丘戦没者記念塔建立
1971（昭和46）年 3月　専攻科廃止
　　4月　大学院商学研究科経営管理専攻設置
1978（昭和53）年 4月　学科改組し、商業学科に「商学コース」と「経営法学コース」設置
1981（昭和56）年12月　旧校舎解体
1991（平成 3）年 10月　学科改組、4学科1課程、大講座制、夜間主コースを設置、短期大学部廃止、言語センター設置
1994（平成 6）年 3月　短期大学部閉学
1997（平成 9）年 5月　札幌サテライト開設
2000（平成12）年 4月　ビジネス創造センター（CBC）設置
2004（平成16）年 3月　商業教員養成課程廃止



国立大学法人小樽商科大学

2004（平成16）年 4月　国立大学法人に移行
　大学院商学研究科経営管理専攻を改組し、新たに現代商学専攻（修士課程）、アントレプレナーシップ専攻（専門職学位課程）を設置
2007（平成19）年 4月　大学院商学研究科現代商学専攻博士（前期・後期）課程設置
2011（平成23）年 2月　輝光寮竣工
　　7月　創立100周年記念式典

本学が輩出した卒業生たち

小樽高商の時代から、本学は就職に強いことで定評を得てきた。しかし、単に就職率が良いだけではなく、その質において卓越していることは、次の各種調査より明らかである。「有名企業就職ランキング」では全国10位（2009年度、『週刊ダイヤモンド』）、「出世できる大学ランキング」では、東大、一橋大、慶應大、京大に次いで全国5位（2006年、『週刊ダイヤモンド』）、「上場企業の役員輩出率」では全国13位（2009年、『プレジデント』）、「生涯給料ランキング（国立大学）」では、一橋大、東大に次いで全国3位（2009年、『週刊東洋経済』）。

▲近年の卒業式

このように、本学は実に多様な業種に優秀な実業人を多数輩出し、その伝統は今に続いている。

しかし、商科系大学でありながら本学の卒業生の中には、文化人や研究者として活躍している者も少なくない。文化人としては、何といっても小林多喜二と伊藤整の名を挙げねばならないだろう。

▲小林多喜二

小林多喜二は、高商時代の歴史を通じて最も有名な人物といえる。伯父のパン工場で住み込みで働きながら北海道庁立小樽商業学校に通っていた多喜二は、小樽高商の競争試験にその学校からただ一人合格して入学した。多喜二は、高商に入ってから本格的に文学をやりだし、『校友会雑誌』の編集委員を務め、近代劇研究会を組織したりもした。高商卒業後は、北海道拓殖銀行に勤め、1929年代表作『蟹工船』を発表した。その社会的価値は、近年の再ブームが証明している。

▲多喜二成績表

▲伊藤整

伊藤整は、多喜二の1年後輩にあたる。整は松前に生まれ、小樽の隣、塩谷村に育ち、小樽中学から小樽高商に入学した。高商時代の整は、多喜二と同じ文学青年で、自分をモデルとした小説『若い詩人の肖像』には、「汽車通」をきっかけに出会った女性との性愛が描かれている。こういった恋愛は、大正時代では例外中の例外であった。また、詩集『雪明りの路』は、雪の小樽をろうそくで彩る祭典「小樽雪あかり路」の由来となっている。

また、実学中心の本学ではあるが、経済学者、経営学者、法学者など、多くの優秀な研究者も輩出してきた。現学長の山本眞樹夫先生も本学の卒業生であり、会計学が専門である。

全人教育 実学、語学、品格

実学

▲実践室

小樽高商初代校長渡邊龍聖の教育方針は「実務教育中心主義」であった。例えば、校内に設けられた商業実践室。これは銀行、倉庫、保険、運送といった機関からなるもので、学生たちは商業を成り立たせる様々な仕組みを模擬的に体験することにより、商品の取引や経営管理などの実務を修得した。また、開校当初より商品実験に力が注がれ、商品学の授業においても、様々な実験テストが行われた。こういった企業実践の最たるものが「石鹸工場」で、「高商石鹸」と銘打たれた、今でいうオリジナル・グッズを、学生たちが北海道各地で実地販売して歩いた。

▲高商石鹸

では、何故、こういった大規模な企業実践が行われたのであろうか。渡邊校長は大野純一(後の小樽商大初代学長)に、こう述べたという。すなわち、商人の重要な務めは買い手や輸入国に喜ばれることにあり、物を取引する者は、より満足を与える商品を掘り出し、考え、作り出さねばならないのである。要するに、理論だけでは物は売れず、相手のニーズを知ることこそが重要で、石鹸工場はそういった商業の実際を学ぶ場なのであった。それ故、工場が赤字であっても、渡邊校長はまったく意に介せず、むしろ会計学の絶好の検討課題だと考えてさえいた。

語学

実学に並び、小樽商大は創立当初から語学教育にも力をいれ、「北の外国語学校」の異名をとるほどに、熱心に外国語を教えてきた。だが、文学部でもないのに、何故、語学重視なのであろうか。それは本学が 100年も前から経済活動のグローバリゼーションを視野に入れていたからで、これから世界を相手にする商人には、語学力もまた欠くべからざる資質であると考えられたからである。それ故、渡邊校長は優秀な語学教師を全国から高商に呼び寄せ、苫米地英俊(後の第三代校長)などは、その教科書が全国で採用されたほどの商業英語の第一人者であった。

語学教育に関して特筆するべきは、戦前に開催されていた外国語劇であろう。小林多喜二や伊藤整も参加したことで有名な外国語劇であるが、これは演出を担当した多くの外国人教師に負うところが大きく、それぞれに熱を帯びた指導が各国語競演の盛り上がりを生み、観劇する小樽市民に「小樽高商の華」と言わしめた。語学重視の伝統に鍛え上げられた高商卒業生は、英語、とりわけコレポン(商業英語)に堪能であると、学外での評判も高かった。

▲外国語劇

品格

本学にとって渡邊龍聖が初代校長であったことの本当の幸福は、彼が実務的教育だけにとどまらず、商人が世界へと羽ばたく時代の要請に応えるべく、実業人に求められる倫理を説いたことにある。曰く、「今日の商人は、知識技能はもちろん、その品格の上でも、国民の上位を占むべき資格を備えねばならない」。これは政治家や官僚が重用されていた時代にあっては、極めて希有な考えであった。つまり、世界の列強を相手にしなければならない日本にとって、知識徳望を兼ね備えた商人の養成こそが国家経済的に緊要な課題であり、だからこそ、渡邊校長は、あどけなさの残る新入生に向かって「諸君を紳士として遇す」と訓示したのである。

こういった全人教育に対する自負から来るのであろうか、渡邊校長は後に各地で起こった高商の大学昇格問題については否定

◀ポプラの下で

小樽高商の渡邊龍聖初代校長が重んじた教育方針、それは「実学、語学、品格」の薫陶でした。つまり、理論だけではない実際的な学問、しかしながら、功利的な成果のみを追うのではなく、人格の養成をも目指す全人教育こそが、本学の建学の精神だったのです。

的で、他の高商の動きを「宗旨替」と非難した。何故に高商はことさら大学の看板を求めねばならないのか。そもそも、大学と専門学校は、「車の車輪、鳥の両翼」であり、理論を究めるにせよ、実務に進むにせよ、それぞれに国家に対して果たす役割があるはずである。そして研究者であれ、実業家であれ、真に求められるべきは、人としての品格に他ならない。この点を誤らなければ、高商は高商としての教育に邁進すればよいというのが、渡邊校長の考えであったのだろう。

▲完成間近の本館

今日のキャンパス

今日の「実学」はといえば、「マジプロ」や「ルーキーズキャンプ」といったユニークな実践活動が挙げられよう。「マジプロ」とは正式名称を「商大生が小樽の活性化について本気(マジ)で考えるプロジェクト」といい、地域と連帯した課題解決型の授業である。昨年は、空洞化が目立つ中心市街地や小樽築港の活性化、小樽に数多い歴史的建造物の利活用、隣国の中国やロシアとの関係について、学生が主体となって検討、分析、討論し、年末にはその成果を小樽市民の前で報告した。他方の「ルーキーズキャンプ」は、その名のとおり新入生を対象とするもので、大学生活への動機づけやキャリア意識の向上を図ることを目的に、上級生、OB、教職員とともに一泊二日の合宿を行っている。その内容はコミュニケーションゲーム、先輩、OBとのトークセッション、グループワーク、プレゼンテーションの練習などからなり、問題をより実践的に設定、解決することを学ぶとともに、先輩に修学上のアドバイスをもらい、また、現在社会で活躍しているOBと交流する貴重な機会となっている。

また、大学院においても、建学以来の実学重視の精神は、平成16年、東北以北唯一の経営系専門職大学院であるアントレプレナーシップ専攻に結実した。それは証券会社や商社などで実務の経験を積んだ教員を取りそろえ、今やワールド・スタンダードとなったMBA(高度な経営能力を備えた企業人の証である経営管理修士号)を授与する資格を与えられている。他方、平成19年には、地方単科大学では珍しい博士後期課程を新設した。こちらは研究型大学院で、実務だけでなく、高度な研究能力を備えた研究者の養成も、本学の新たな目的となった。奇しくも渡邊校長が言った「車の車輪、鳥の両翼」がひとつ所に揃ったわけである。

▲マジプロの「一日教授会」での報告

▲ルーキーズキャンプでのグループワーク

▲アントレプレナーシップ専攻授業風景

一方、「語学」に関しては、平成3年に、文部省(現文部科学省)の認定する省令施設として言語センターが設立され、小規模大学では異例ともいえる7言語(英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語)が教授されている。残念ながら外国語劇はもうないが、意欲のある学生は、今や13ヶ国、計19大学に上る協定校への留学を目指して語学に励んでいる。また、これも語学重視の伝統の恩恵であるが、商学部でありながら特別に授与が認められている英語教員免状を得て、英語教師となった卒業生も少なくない。

最後に「品格」であるが、いつの時もこれを忘れることのない全人教育が、今日の商大の礎(いしずえ)を築き、今に至っていることは言うまでもない。山本眞樹夫現学長も、音楽ができる学生こそが商大の卒業生に相応しい、と語ったことがある。ここで「音楽」とは「品格」の比喩であり、「絵画」でも「詩」でも構わない。問題は豊かな心で広い教養を身につけることで、本学の使命は、複雑で多種多様な価値観が交差するグローバル化した現代社会においても、人々から信頼を勝ち得る品格を備えた学生を輩出し続けることに他ならない。

地域と商大

「小樽高商は小樽区の徽章である」（渡邊龍聖）

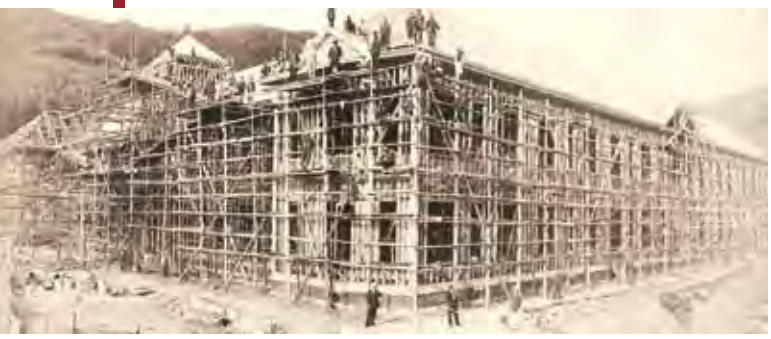
高商誘致運動

小樽の高等商業學校

▲高商創立決定の新聞記事

「小樽に高商を」と第一声をあげたのは、当時小樽商業会議所特別会員だった小町谷純氏とされる。北海道の外国貿易振興上、小樽に高等商業学校を設置する必要があると、内閣法制局長官に力説したのである。これを受け、小樽区も明治32年には、将来多数の外国人が来樽することが見込まれることを理由に、政府に高商設置の希望を述べた。そうした折、明治39年に、文部省が日本で五番目の高商新設を決めると、小町谷氏の「小樽に高商を」の思いは小樽区民の願いとなり、誘致運動がにわかに具体化していった。有力な候補地は、当時北海道一の人口を誇った函館であった。これに対抗するために、小樽を代表して上京した金子元三郎代議士は、「小樽に高商を持って来るならば、学校の敷地はもとより、先生の官舎、学生の寄宿舎等を、全部地元で寄付する」と、政府に並々ならぬ決意を語ったという。

こういった猛烈な働きかけの結果、政府は、地元が建設費35万円のうち20万円を負担するならば、小樽に高商を設置してもよいと返事をした。こうなれば後は決断するだけで、知らせを受けた椿蓁一郎小樽区長は、数人の地元有力者と協議しただけで、敢えて区会は通さずに承諾の旨を返電した。当時、公立病院を優先すべきだとの異論もあったし、なにしろ20万円の地元負担である［小樽区の年間予算は約30万円］、区会が紛糾するのは目に見えていた。こうした綱渡りともいえる英断を経て高商の小樽設置は決定したわけで、本学はその創設期から多くの市民に支えられ、市民が創立者と言っても過言ではない。まさしく、渡邊初代校長が述べたように、「小樽高商は小樽区の徽章である」。



▲校舎本館建築中

大学昇格運動

次に地域の支援が大きな実を結んだのは、大学昇格運動の時である。戦中、戦後の学園（当時は小樽経済専門学校）は混乱にあって、人的にも物的にも困難な状況にあった。強い危機感を抱いた当時の大野純一校長は、事態を一気に打開するため大学昇格を決意した。小樽市民もかつて自分たちが誘致した学校の窮地に立ちあがり、ここに、教職員、同窓会、小樽市が一体となった昇格運動が始まった。昭和21年、緑丘会定時総会において大学昇格案が可決されると、同年10月には小樽市議会が昇格要望に関する決議を採択、また「小樽経専昇格小樽商大設置市民大会」も開催され、500名を超える市民が参加した。その後設立された「小樽商科大学期成会」は、300万円もの募金を集めた。

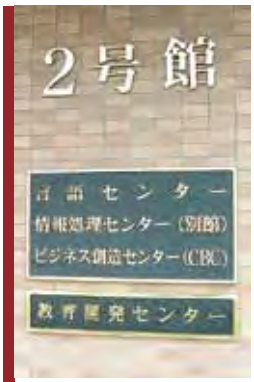
ところが、時代は敗戦直後である。北海道では大学は3つで足ると考えるGHQが、本学を北海道大学に併合しようと目論んだ。だが、大野校長は「他大学に合併するくらいなら、むしろ新制高校となって日本一の高校になろう」と決意を固め、今度は単独昇格を賭けた精力的な運動を起こした。こうして昭和23年8月、大学教育課長のW・C・イールズ氏が北海道の大学を視察する運びとなったが、北大で開かれた会議の席上、氏は開口一番、わずか汽車で一時間なのに、小樽経専は何故北大との合併に反対するのか、と詰問してきたという。大野校長は7つの理由を挙げてこれに答えたが、その最後の理由は、小樽経専の商科大学への単独昇格は学校当局のみならず、同窓、北海道民の世論であり、アメリカが世論の国であるとするならば、この世論に耳を傾けて欲しい、というものだった。最終的にGHQは特に本校にかぎって単独昇格を許可したが、本学の個性豊かな教育や、文系には珍しい充実した自然科学施設と並んで、やはり世論が単独昇格を強く望んでいたことが、認可の大きな理由であったと言われている。

地域社会との関わり

以上のように、小樽商大は、創設期だけでなく、戦後の混

商大図書館学外開放のご案内　商大図書館 TEL 0134-27-5273
開館時間［通常期間］／（月～金）8:45～22:00、（土）10:00～19:30、（日・祝）10:00～17:00
〃　［休業期間］／（月～金）8:45～17:00、（土・日・祝）10:00～17:00

小樽商科大学は小樽市民の熱意に支えられて、今年100周年を迎えることができました。ここでは本学と小樽を中心とする地域との関わり合いを振り返るとともに、現在において、そして将来にわたって、どのような形で地域貢献を果たすのか、紹介したいと思います。



乱期にも、またその後の時代にあっても、いつも地域に支えられてきた。その恩に報い、蓄えた知見を地域に還元して貢献するべく、本学は現在、特に産学官連携に力を注いでいる。その拠点が平成 11 年に設置されたビジネス創造センター（CBC）で、当センターは社会科学系国立大学では初の「共同研究センター」として地域に根差した研究を行い、その成果をビジネス系イノベーションの創出に役立てている。

また、知の技法を地域に伝えるものとして、昭和 35 年から 50 年近くに渡って、市民向け公開講座を継続して開催し、ネイティヴ・スピーカーによる語学講座には根強い人気がある。加えて、最近では本学図書館主催の「ゆめぽーとライブ」も一般に浸透してきた。駅前プラザ「ゆめぽーと」は市民と大学との交流の場で、そこで定期的に本学関係者が、経営学、歴史、文学、健康科学といった多様なテーマで講演し、小樽市民の知的好奇心に応えているのである。さらに、夜間開講の通常の授業も一般市民に開放されており、生涯学習の場として喜ばれている。

また、附属図書館も一般に開放されている。大学昇格運動の際、多くの寄付が図書購入に充てられたこともあり、図書は大学だけのものではなく、地域の方々との共有財産でもある。そういったことからも、本学は図書館の開放や図書の一般貸し出しを行い、直接来館できない方には宅配貸出サービスも行っているのである。

▲一日教授会

その他、年に一度市民の方々に集まっていただいて、商大について日ごろ感じていることや、大学に関する意見を直接述べていただく「一日教授会」も毎年恒例の行事となった。また、市民の方々との交流を図るため、大学としておたる潮まつりに参加したり（平成 21 年度、22 年度と 2 連覇中！）、学生の大学祭や、職員主催の真夏のビヤパーティーに市民をお誘いしたりして、地域に開かれた大学となることを目指している。

▲流しソーメン（大学祭）

さて、開校から 40 年ほど後のことである。誰よりも先に「小樽に高商を」と唱えた小町谷純氏は、期待に違わず実業界の第一線に立つ高商卒業生の活躍に、「欣快至極、欣快至極」と快哉を叫んだという。それからさらに半世紀、景色も建物も見違えるほどに変わった本学であるが、変わらぬ伝統と精神を引き継ぐ学生達には、昔と同じ言葉をかけていただけるのではなかろうか。商大は今後も地域との絆を大事にしていきたい。

▲おたる潮まつり

小樽での学生生活

いつの時代も小樽の町に大切にされてきた学生たちは、地元の町でどのような生活を送ってきたのであろうか。娯楽もそう多くはない時代、それでも高商生は暇を見つけては丘を下って町に降り、いろんな場所に出向いていった。とりわけ映画は彼らのお気に入りで、北のウォール街として羽振りの良かった小樽には、当時、映画館がいくつもあった。学生たちは仲間と連れ立って映画に興じ、当時の映画館関係者も、学生が来なければやっていけない、と語っているほどである。

▲映画館で

また、学生が部活動等の打ち上げでビヤホールに出入りする姿も多々見られた。こんな逸話が残っている。渡邊初代校長がビヤホールに入ったところ、学生がたくさんおり、気を利かせて他の店に移ったところ、そこも学生でいっぱいで、再度、数軒回ってみたものの、どこもかしこも学生にあふれ、結局落ち着かないまま帰宅するしかなかった。今でも商大生が夜の花園界隈に赴けば、昔に変わらない叱咤激励を投げかけてくれる店も少なくない。あるいは逆に、こちらが入った店に商大生の働く姿を見かけることも、ままある。アルバイトで学費や小遣いを稼ぐ上で、小樽の町に世話になった学生は数知れないことだろう。

▲本屋

現在では学生の多くが札幌から通学しており、学生と市民の繋がりは昔に比べ希薄になっていることは否めない。実に残念なことだが、しかし、だからこそなのか、最近は地元小樽の活性化や情報発信に興味を寄せる学生が逆に増えてきており、以前とは別のかたちで地域との関わり合いを模索しているようである。また、今春には新しい学生寮もでき、全国から集まった学生たちが小樽の町と新しい関係を築くことを期待したい。

▲パチンコ

市民交流の場：小樽駅前プラザ「ゆめぽーと」をご利用下さい。
小樽市稲穂３丁目３番１号（小樽グリーンホテル別館内）　TEL 0134-32-4624
開館時間／火曜日～土曜日　１３：００～１９：３０

課外活動 よく学び、よく遊べ

交友会は、学友の親睦、心身の修養、堅固なる校風の樹立を目的として、本学開校の年の12月に設立された。それは学芸部、武道部、運動部とからなり、発足にあたっては、渡邊初代校長が「英の学生の紳士的なる態度、独の学生の秩序を重んずる精神、米の学生の活動を喜ぶの長所を渾然融和して邁往すべし」と訓示した。

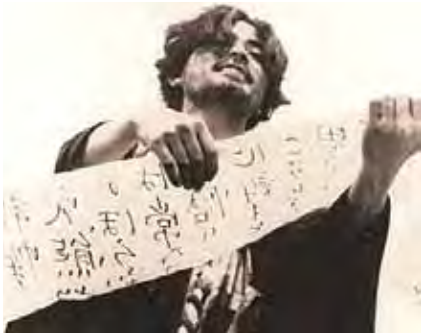
学芸部には弁論部と雑誌部があった。校友会発足式の午後、弁論部は早くも熱弁をふるい、わずか七十の新入生がいるだけのキャンパスを大いに鼓舞した。翌年、弁論部の一部は外国語部となって外国語劇を創始し、メーテルリンクの『青い鳥』を日本で初めて演じたりした。他方、雑誌部（後の編纂部）もまた、同じ年の3月に『校友会雑誌』を創刊し、これが後の『緑丘新聞』となって、創立25周年記念号の部説において、「北に一星あり、小なれどその輝光強し」の名言を生むことになる。その他、支那研究会、会計調査会、商品学会、ロシア学会といった学術研究会も、開校の早い時期に活動を開始した。また、商業学校でありながら、文学サークルも大変盛んであった。

武道部には柔道部と剣道部があった。いずれも武士道による人格の修養を目的とし、柔道部は苫米地英俊、剣道部は佐藤文助の両講師が師範となった。苫米地は現役時代わずか一敗の猛者で、講道館の加納治五郎に傾倒し、恩師の「柔道を広めよ」との命もあって、北の小樽に赴任した。他方、佐藤師範もまた、剣道の本尊は正義を学ぶことであって、敵の失敗に乗ずることは最も忌むべきことだ、と説いたが、校友会の発足直後に行われた武道大会では、「滅多矢鱈に竹刀を振りまわし、殴って、殴って、殴り飛ばす」といった、バンカラ丸出しの試合もあったらしい。武道部には後に弓道部が加わった。

運動部には野球、庭球、端艇の各部があり、少し遅れて、スキー、ローラースケート、蹴球、相撲が加わった。その活動は雑誌部の『校友会雑誌』に紹介され、例えば野球部の設立は、「ぼんやり野球部が生まれた。紅を弥生に包む昼酣（たけなわ）なる時、何処からともなく、球友（ボールメート）が三人五人赭（あか）色のグラウンドに集って来る間に、何時ともなく出来上がった」と記されている。また、写真のローラースケート部などは、高商こそが日本で、いや東洋で、ひょっとすると世界で最初にローラースケート部を認めた学校で、「即ち我ローラースケーティングの成功不成功は、実に少なくも我日本のローラースケーティングの成功不成功である」とぶち上げてもいる。

対抗戦の始まりは、明治45年5月の農大（現北海道大学）との野球試合で、この時、高商は0対25の大敗を喫した。が、屈辱的な記録は『校友会雑誌』に記されず、その代わりに「多忙なるその境遇と球界の覇者とは到底両立するものにあらずという運命論（フェイタリズム）の縄で縛られている」と、もっともらしい屁理屈をこねてプライドを保っている。とはいえ、翌6月に行われた第二戦では高商が10対2で雪辱を果し、凱旋した選手たちを全校生が駅で迎え、ここに両校の良きライバル関係が生まれた。こうして野球から始まった北大との対抗戦は、やがて他の部にも拡大していき、中でも庭球部は野球部と同じ年の秋に対抗戦を始め、まもなく100年の歴史を迎える。

応援団も野球対抗戦をきっかけに発足した。とりわけ両校応援団の繰り広げる対面式は華々しく、商大団長と北大団長による挑戦状と応戦状の読み上げ、団員達の演舞や団旗エール、「北大の白豚」、「商大の



聞くところによると、現在、商大生のサークル所属率は日本一とのこと。そんな活発な課外活動の歴史を開いた一世紀前の先輩たちは、教室の外でどのような活動に励んでいたのでしょうか。

山猿」の野次合戦が、会場に集った小樽、札幌の両市民を大いに楽しませた。この対面式は商大側の団員不足のために平成9年をもって中断していたが、昨年、11名の学生が入団し、実に13年ぶりの復活が叶った。復活にあたっては、長い歴史の中で初めて女性団員が誕生し、現在の応援団長はその彼女である。まさしく隔世の感を禁じえない卒業生も多いことだろう。

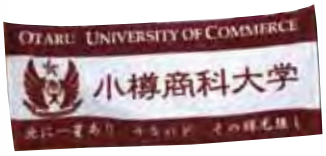
スキー部はオリンピックに部員を送り込んだ実績もあり、その歴史は他に比しても輝かしい。その下地を作ったのはやはり渡邊初代校長で、学生達に長い冬の楽しみを与えようと、全国で初めてスキーを体育に採用した。開校した年の冬、苫米地講師が新潟県で行われた競技大会に派遣され、スポーツ万能の苫米地は、学んだスキーの技術とともに、3台のスキーを初めて北海道に持ち帰った。翌冬、100台のスキーが学校に備えられるや、学生の皆が虜となり、また、市民向けのスキー教室も開始されて、大人も子供もこぞってスキーを楽しんだ。本学こそがスキー大国小樽の礎（いしずえ）を築いたのである。

その他市民の楽しみでもあった大運動会、広く実社会を知るべく海外にまで赴いた修学旅行、親元を離れた寮内での暮らしぶり、親しみを込めて「高商の生徒さん」と呼ばれた学生達の町中での武勇伝など、紹介したいことは山ほどあるが、もはや紙面に余裕はない。そこで一気に時を移して、今日の学生の課外活動に目を向け、とりわけ最近の新しい動きをピックアップしてみよう。

翔楽舞

YOSAKOIソーラン祭りのチーム。2007年に発足、約130名の商大一の大所帯に急成長。最高成績は2009年のセミファイナル4位。市内の清掃など、ボランティア活動も熱心。

地獄坂工房



実学の実践として、Tシャツやタオルなど商大グッズを企画、制作。オリジナル就活手帳は、実際に中国の会社と輸入取引して制作された。企業化も視野に入れている。

Colpen

歴史ある（旧）岡川薬局の建物で商大生が出店しているコミュニティー・カフェ。「人と人との輪」をテーマに、市民や観光客の交流の場を提供。大きなクッキーが人気。

小樽笑店

商大生と市民との架け橋となることを目標に、地元小樽を活気づけるイベントを企画。小樽の町や地元で頑張っている人たちを紹介する『樽笑新聞』も創刊した。

Canal

市場や商店街の方々と触れ合い、ブログで小樽の食をPRする情報発信サークル。小樽の食材を使った簡単レシピも考案。活動から生まれたワインゼリーは商大グッズに認定された。

学生編集員

2007年より『学園だより』の制作に学生が加わった。1983年の『緑丘新聞』の休刊以来、久々の学生による編集作業で、その成果はこのほど百周年記念出版『輝光』にまとめられた。

i-vacs株式会社

商大生が起業した会社で、ゼミから誕生した。ネット上で札幌狸小路を3D仮想空間化してその魅力を伝え、地域の活性化を手がける。

http://www.i-vacs.com/

株式会社 SEA-NA

これもゼミから発展した学生企業で、インターネット広告やホームページの作成、運営を通じて、小樽の魅力をアピールしている。

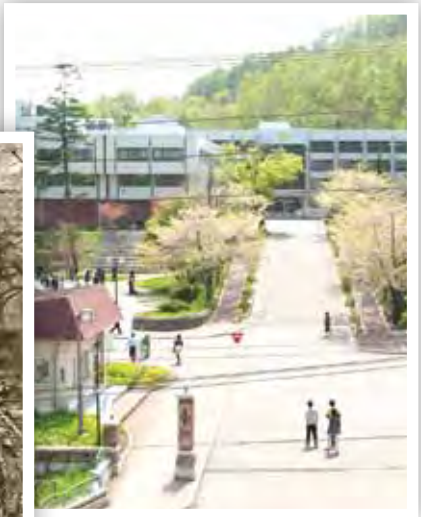
http://www.sea-na.net/

ゼミナール協議会
商大はゼミ教育が充実しているけど、学生自身がゼミを盛り上げているんだよ。"ゼミナール協議会"といって、冊子やイベントでゼミを紹介する課外活動が、なんと昭和30年代の昔からあるんだ。驚きだね。

商大今昔写真館

▲商大から見る小樽港と石狩湾

商大は小樽の町が函館や仙台との誘致合戦に競り勝って得た戦利品である。渡邊初代校長はこのことを「本学は小樽区の徽章である」と述べた。以来、緑ヶ丘の同じ高台に建つ商大は、100年の長きに渡って、商都小樽の港を、石狩の海を見守ってきた。



▲正門から校舎へ通ずる坂

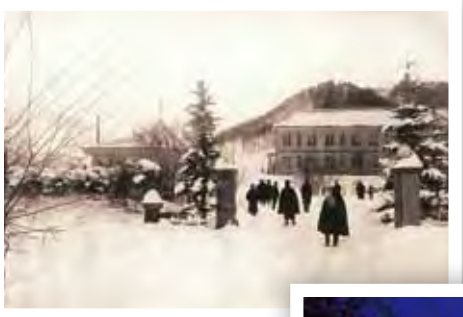
地獄坂を登りきると、正門より校舎へとなだらかな坂が続く。現在、学内には往時の建物は残っておらず、赤レンガの正門も17年前に復刻したものである。が、この緩やかな坂は昔のままで、最近では傾斜を利用した流しそうめんが新名物となっている。

▼地獄坂

商大に通ずる長い坂は地獄坂と呼ばれている。冬は深雪をかき分け、夏は汗まみれで登校した学生たちが、そう名付けた。今でこそバスが上まで登ってくるが、一昔前までは、坂の途中で立ち往生する車を押してやるのが、商大生の冬の務めだった。

▼雪景色

冬の朝、教室に入ると、学生が半分しかいないことがある。聞けば、雪で列車が止まったという。雪には毎年悩まされるが、冬には冬の楽しみもある。近年の「小樽雪あかりの路」への参加もそのひとつで、学内に灯されたキャンドルが淡い幻想に誘う。



◀図書館

勉学の基本が読書にあることは昔も今も変わりないであろうが、最近はインターネットも情報収集に欠かせない道具となった。しかし、クリックひとつでコピーして貼り付けただけのレポートは、大抵の場合、先生にばれる。

▶授業風景

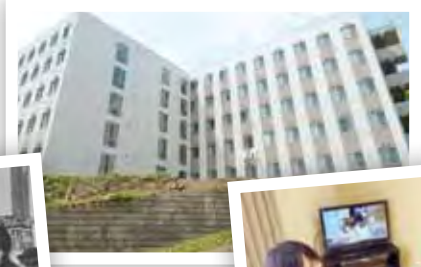
かたや学生服に身を包んだ短髪集団、かたや服装にも髪形にもこだわる現代っ子。のみならず、かつての野郎だけのむさ苦しい（失礼！）教室には、今や女子学生の軽やかな声が響き渡り、男女比は6：4にまで達している。

◀前庭の憩い

左の写真は、短い影からみて、昼休みの校庭であろうか。桜も満開の季節、手前で寝そべる彼はいかにも気持良さそうである。右は今の前庭で、やはり授業の合間の息抜きの場となっている。

▶学生寮

最後の智明寮の廃寮から30年近く、学生寮不在の状態が続いていた。その間、道外出身の学生が極端に減ったこともあり、100周年を機に新寮を建てることとした。その名は輝光寮で、この4月より入寮が始まった。全国の学生よ、小樽に学び、小樽で遊べ！



失われた風景

◀ジャンプ台

旧図書館裏手の山の斜面にあり、数々の名ジャンパーを生んだ。

▲石鹸工場

ニシンの油から作った石鹸を高商生が売り歩いた。

▲螺旋階段

鉄製のモダンな造りで、旧本校舎を入ってすぐにあった。

▼旧本館玄関

避雷針として商業と学術の神ヘルメスの杖が据えられていた。

▲商品陳列館

商品の見本と貿易国の本物の通貨が陳列してあった。

◀ポプラ

前庭の海側に立ち、学生たちを見守っていた。

INFORMATION

公開授業（後期科目）のご案内

小樽商大は夜間主コースの授業を市民の皆様に一般公開しております。今年度の後期科目受講者を下記のとおり募集いたします。

■募集期間：10月3日（月）から10月14日（金）（土・日を除く）
申込受付は先着順とし、定員になり次第締め切ります。
■授業時間：17時45分～19時15分・19時25分～20時55分
■受講料：1科目9,200円
■お問い合せ先：小樽商科大学学務課学部教務係　TEL 0134-27-5244
http://www.otaru-uc.ac.jp/hkyomu1/koukaikouza/koukaikouza-top.html

オープンキャンパスのご案内

高校生の皆様に大学構内を実際に見てもらい、模擬講義やキャンパスツアーを通じて本学を知っていただくために、下記の日程でオープンキャンパスを開催いたします。カリキュラムや学生生活の紹介、留学や就職などの説明の他、各種相談コーナーで先輩達の生の声を聞くこともできます。また、学食体験や応援団の演舞もありますので、家族や友達をお誘いあわせの上、是非ご参加ください。

■開催日時：平成２３年８月５日（金）　11：00～15：00
■お問い合わせ先：小樽商科大学入試課　TEL 0134-27-5254・5253
http://www.otaru-uc.ac.jp/hnyu1/welcome.htm

図書館主催市民向け講演会 ゆめぽーとライブ2011

去る6月1日（水）、本学駅前プラザ「ゆめぽーと」にて《ゆめぽーとライブ第８弾》が開催されました。講師は本学の中川喜直教授（健康科学）で、先生は先ごろ『もうひとつのスキー発祥の地－おたる地獄坂－』（小樽商科大学出版会、2011）を出版なさいました。今回のライブでは、ご著作と同じタイトルで、スキーが北海道に伝来した際、旭川に並んで小樽地獄坂でもスキー講習会が開催されたことや、前身の小樽高商が日本で初めてスキーを正規課目に取り入れたことなどを、紹介していただきました。また、スキー人口が減っている中、今後のスキーの活性化について意見交換もなされ、スキー王国小樽ならではの大変有意義なライブとなりました。また、参加者には先生の御本も配られ、大変な好評をいただきました。

▲講演をする中川先生

第９弾の予定
■開催日時：7月22日（金）18時～19時30分
■講師：嘉瀬達男准教授（中国語、中国文学）
■テーマ：「『史記』の読み方、作り方」

第20回 YOSAKOIソーラン祭り 小樽商科大学YOSAKOI「翔楽舞」敢闘賞受賞!

国立大学法人小樽商科大学の役職員の給与水準の公表について

本学では、平成２２年度の「国立大学法人小樽商科大学の役職員の給与水準」を下記ホームページにて公表しております。
http://www.otaru-uc.ac.jp/info/yakuin/kyuyosuijyun/
【お問い合わせ先】小樽商科大学総務課人事係
TEL 0134-27-5208

ホームページをリニューアルしました

http://www.otaru-uc.ac.jp/

平成23年度後期行事予定

10月　3日	後期授業開始
12月23日～1月10日	冬季休業
1月14日～　15日	大学入試センター試験
2月　8日～　16日	後期定期試験
2月25日	前期入学試験
3月16日	学位記授与式

様々な百周年記念行事を開催します

■創立100周年記念展示会
○日　時：平成23年7月2日（土）～8月26日（金）
○会　場：小樽商科大学史料展示室

■グリークラブ演奏会
（本学同窓の男声合唱団演奏会）
○日　時：平成23年7月18日（月・祝）〈海の日〉
15時開演
○会　場：小樽市民会館

■国際シンポジウム・記念講演会
●テーマ：グローバリズムと地域経済
○日　時：平成23年8月26日（金）
○会　場：小樽商科大学
○対　象：研究者（入場無料）

○日　時：平成23年8月27日（土）
○会　場：京王プラザホテル札幌
○対　象：一般の皆様（入場無料）

■音楽祭
（ベートーベンの第九交響曲などを市民の皆さまと歌う音楽祭）
○日　時：平成23年10月10日（月・祝）〈体育の日〉
○会　場：小樽市民会館

■小樽小林多喜二国際シンポジウム
○日　時：平成24年2月21日（火）～23日（木）
○会　場：小樽商科大学講義室

学生や先生の活動、イベント、学内の風景等をブログで毎日好評更新中！
商大くんがいく！ 100th Anniversary
http://www.otaru-uc.ac.jp/shoudai-kun/

編集後記

初めての筆が100周年特集号というのは商大教員として縁を感じました。ところで、私の尊敬する商法学者の一人に小町谷操三博士がいますが、今回、その御尊父、純氏が高商誘致を最初に主張されたことを知り、非常に驚きました。また、市内の古書店で購入した博士の『イギリス会社法概説』には博士の直筆で「謹呈坂牛直太郎学兄」と書かれており、小町谷親子と小樽との繋がりも感じています（なお、坂牛邸は小樽市指定歴史的建造物として市内入船町で一般公開されています）。（M）

編集スタッフ　尾形弘人、加藤敬太、中村　史、南　健悟

【ご意見・ご要望のお願い】
広報委員会では、読者の皆様のご意見・ご要望をもとに、より良い広報誌を作成する所存です。取り上げてほしい話題、質問したいことなど何でも結構ですから下記にお寄せください。
E-mail kouhou@office.otaru-uc.ac.jp　FAX 0134-27-5213

編集・発行／小樽商科大学広報委員会
〒047-8501 小樽市緑3丁目5番21号 電話0134-27-5207

バックナンバーはこちらから
http://www.otaru-uc.ac.jp/hsyomu1/hermes

誌名の由来　ヘルメス（Hermes）は、ギリシャ神話の神の一人で伝令の神、また商業、学術などの神、クーリエ（courrier）とはフランス語で郵便物のことですが「～通信」として新聞紙名等に用いられています。ですから「ヘルメス・クーリエ」とは「商大通信」であるとご理解ください。